

協同組合主義再考

—古くて新しいもの—

客員研究員 明田 作

〔要 旨〕

協同組合主義は、19世紀の産業革命後の社会主義思想と密接不可分のものとして19世紀のヨーロッパで誕生した。

その後、多くの協同組合が誕生したが、労働者生産協同組合は成功せずそのほとんどは消滅した。しかし、モンドラゴンに代表されるように、戦後、新たな形で復活し、社会的経済を担うものとして期待が高まっている。

企業のタイプが資本中心主義か人間中心主義かで、生産性や効率性において異なるという理論的根拠はない。左派の多くの理論家は、依然として労働者生産協同組合は成功しないと主張しているが、それは彼らの頭が皮肉にも資本中心主義の考え方に支配されているからである。

経済社会は様々なタイプの組織が支えており、資本主義か社会主義かといった二項対立的な議論は生産的ではなく、人間中心の倫理的な経済の仕組みが構築できるかどうかは、政治的選択と我々の意識にかかっている。

目 次

はじめに

1 協同組合主義をめぐる

- (1) わが国の産業組合主義とそれへの批判
- (2) ユートピア思想と協同組合

2 ユートピアの持つ力

3 レイドロー報告の今日的意義

4 モンドラゴンの実践

5 資本主義をめぐる新たな危機と協同組合 おわりに

はじめに

「協同組合とは何か」というのは、古くて新しい問題である。多くの協同組合関係者にとっては、国際協同組合同盟（ICA）の「協同組合のアイデンティティに関する声明」（1995）の協同組合の定義および価値並びに原則から導き出されるものが頭に浮かぶであろう。しかし、それは世界中の協同組合運動の長い歴史と経験から抽出された共通の枠組みを用意することによって現在および将来にわたって協同組合運動を発展させるためのもので、まして協同組合の成功を保証するものではない。問題なのは、この崇高な声明があることによって、むしろ自らが「協同組合とは何か」ということを問わなくなることである。

ところで、やや古くなるが1980年のレイドロウ報告（『西暦2000年の協同組合』）は、わが国の協同組合人や研究者に刺激を与え、そこで取り上げられた労働者協同組合であるモンドラゴン協同組合は世界中から注目を集めることとなった。わが国でも多数の翻訳書や関係する論文等が出されるなど、新たな協同組合論のブームを巻き起こしたことは記憶に新しい。労働者協同組合は古くて新しい協同組合の形態であるが、わが国でも20年には労働者協同組合法が制定されるなど、協同組合運動もある意味では新しいフェーズに入ったといえなくはない。

協同組合は、社会秩序が変動し、人々が誰にも頼れない状況のなかで、自らの力で

解決を迫られる時代に生まれ、定着するというのは歴史が示すところである。戦後の福祉国家が資本主義経済の衰退とともに新自由主義経済へと政策運営の舵を切るなか、企業の倒産・失業の増大、コミュニティ経済の衰退、弱者切捨てや社会的不平等の拡大など、様々な経済・社会問題が顕在化し、これらに対処するための自主的取組みが世界中に広まっている。これに対し、為政当局にあっても、92年、94年および01年の国連決議（A/RES/47/90, A/RES/49/155, A/RES/56/114）並びに02年の国際労働機関（ILO）の勧告（R193）を契機に、協同組合が共有する価値観や事業モデルがこれらの問題に対処するためには有益で有効だという認識が高まり、政策的枠組みの整備も進んできているといえる。

また、最近では資本主義の終焉論とも関連してそのオルタナティブな組織論として新たな協同組合主義が論じられることも多くなってきた。

したがって、論ずべきテーマは限りないほどあるが、本稿では、古くて新しい問題である協同組合主義（Cooperativism）という協同組合運動のコアともいえるべき精神的なテーマにつき、筆者なりの視点を提供できればと考えている。

1 協同組合主義をめぐる

(1) わが国の産業組合主義とそれへの批判

産業組合主義とは何か。わが国では、産

業組合中央会の主事となり、39年（昭和14年）には同中央会の会頭に就任した千石興太郎が唱導したものである。それは営利本位の資本主義制度を否定し、「相互協同の経済制度たる産業組合組織を完成し、その機能を拡充することによって、一般民衆の福利の増進をはかり、生活を安定し、すすんで社会の皆和協調を実現することを主張する・・・この主張を産業組合主義と称し、その主義の実現を促進するために実行する諸般の行動、それが即ち産業組合運動」（「産業組合主義経済の話」産業組合宣伝叢書第10号・産業組合中央会/昭和4年3月、仮名遣い等は現代風に筆者が修正）というものであった。ちなみに同時期につくられた「深山の奥の^{そまびと}杣人も」で始まる産業組合歌（昭和3年制定）の三番の歌詞は「時の潮は荒ぶとも/誓いはかたき相互扶助/愛の鎖に世を巻きて/やがて築かん理想郷」と、夢を歌っている（注1）。

この産業組合主義（「協同組合主義」と同義）は、ロシア革命後のマルクス主義ブームのなかでのマルクス経済学者からの批判に加え、第2次世界大戦に向かう国家総動員体制のもとでの全体主義への結びつきによるその偏向もあって、戦後、資本主義経済への批判的な精神を含む「協同組合主義」という言葉は消えてしまった。

とりわけマルクス経済学者の近藤康男は、協同組合は商業資本の節約によって資本制生産における流通過程の合理化を任務とし、資本主義の揚棄に対しては何らの力を持ち合わせておらず、産業組合主義（協同組合

主義）は、協同組合が利潤を否定し資本主義でもなく社会主義でもなく協同組合主義による新しい経済制度を創り出すものであるというバラ色の幻想をふりまくものであるとして、厳しい批判を加えた（近藤（1974）初版：昭9年）（注2）。

しかし、戦後は、農地改革後の中・小農民の農業経営・生産問題の関係から農協そのものの機能・本質をめぐる協同組合論が展開されるが、農協の経営不振問題もあり、その後高度経済成長が終わり新たな経営問題が表面化するなか、協同組合主義が論じられることもなくなった。

（注1）那須皓（当時、産業組合中央会の参事）が第5回産業組合記念日に先立って産業組合産業組合の第25回全国大会での講演に訂正増補をした「産業組合の本質と将来の社会」というタイトルで千石の協同組合主義を解説した記事を書いている（産業組合宣伝叢書第12号/昭和5年2月）。

（注2）近藤の『協同組合原論』が刊行された昭和9年当時は、昭和の大恐慌後の国の経済更生計画の一環として産業組合拡充計画が取り組まれていた最中のことであり、社会に与えた影響も大きいものがあった。

なお、同書での批判は、『協同組合と農業問題』（改造社・昭和7年）の著者の東畑精一に対して向けられているが、同書は、那須皓・東畑精一共著であり、批判の対象の協同組合主義は、那須皓が執筆した章・節であったようで、東畑精一単著『協同組合と農業問題』（改造社・昭和23年）では、協同組合主義に言及している部分は削られている。東畑が協同組合に言及した部分では、「協同組合的なものに含まれた結合原理が資本主義のそれと異なる限り、そこには資本主義改革の内在的可能性が横たわっている」としているだけであり、近藤らの批判はその限りでは当たらない。

これは、労働者生産協同組合は存在しないなかでの産業組合制度のもとでの議論であったが、戦後企業組合制度が誕生した後であっても、近藤は労働者生産協同組合（企業組合）に関しても協同組合の流通過程の合理化を担う商業資本

の特殊な企業形態の一つであるという見方を変えてはいない（近藤康男『新版 協同組合の理論』御茶の水書房・1966年）。

（2） ユートピア思想と協同組合

昭和恐慌期にわが国で千石興太郎らによって主張されていた協同組合主義は、産業革命と産業資本主義がもたらした労働者の貧困・惨状等への対応として現われた社会主義思想（注3）と密接不可分のものとして19世紀のヨーロッパで誕生したものである。それは、村落共同体における生産と生活における相互扶助の伝統と、とりわけ「ユートピア社会主義者」と呼ばれた思想家の思想に基づいたものであった（注4）。

マルクスの『共産党宣言』によって「ユートピア社会主義者」のレッテルを張られたサン・シモン（1760-1825）、フーリエ（1772-1837）およびオウエン（1771-1858）であったが、彼らはマルクス主義者に大きな影響を与えると同時に、協同組合思想の展開に重要な役割を果たした。

それぞれの具体的な影響を述べる余裕はないが、フーリエの社会改造の思想は、農園的協同社会ともいべきファランジュで、その一環としてのファランステールの建設に向かった。そこでの生産の協同と消費の協同との結合は、オウエンのハーモニー村の建設にも通じるものがあつたし、オウエン主義者たちの理想であつた消費の協同化から生産の協同化へと向かい、最終的には自律的なコロニーをつくるという考えにきわめて近い思想であつた（五島茂・坂本慶一（1975）参照）。その思想の痕跡は、後に

「ロッヂデール原則」として、今日の世界の協同組合の原則の基礎となるロッヂデール公正開拓者組合の設立時の規約（定款）にみて取れる。しかし、その後の定款からはオウエン主義者たちの協同組合主義という精神は薄らぐこととなり、G.D.H.コールは「オウエン主義の名残りを留めるものは、言葉使いの形式であり、そして恐らく一層価値があることは教育に対するある種の信仰、利潤の一部を教育の用途に割くという伝統だけであつた」（Cole,G.D.H.（1947）小林ほか訳41頁）としている。

サン・シモンは、産業革命の進展の過程で生ずる問題を鋭く分析したものとして、マルクスやエンゲルスによって高く評価されていた。サン・シモンの協同組合的思想は、産業者（働く者たちすべての意）による組合（アソシアシオン）を基礎にした秩序ある産業社会（産業制度）構想のなかに含んでいるが、労働者生産協同組合の先鞭^{せんべん}をつけたのは、フランスの協同組合運動の父といわれるサン・シモン派のフィリップ・ビュシェ（1796-1865）であつた。

19世紀のユートピアンに共通するのは、19世紀の啓蒙主義^{けいもう}（注5）とフランス革命後の自由放任主義に密接に結びついた進化論や唯物主義的な考え方に対する抵抗としての社会主義的な思想であつたといえる。それは、カトリックであれプロテスタントであれ、キリスト教的な社会正義に基づく新たな社会秩序の確立といった思想であり、その根底にあつたのは宗教的価値観だつた。とりわけ、サン・シモンは、新たな社会が

それなしでは立ち行かないところの新しい統一を創造するための宗教が不可欠だとし、彼は当時墮落してしまったと感じていたカトリシズムとプロテスタンティズムに代わる新しいキリスト教（サン・シモン教）が創設されなければならないと考えていた（Lefranc, G. (1966) 花崎訳・上33p）（注6）。

ところで、19世紀の社会主義思想が、労働者の問題を解決することが中心的関心事であったことからすると、協同組合も、消費協同組合ではなく労働者の協同組合、とりわけ生産手段を自ら所有する労働者生産協同組合が主体となるのは自然であったことになる。

（注3）社会主義をどのように定義するかは難しい。最初に社会主義（Socialisme）という言葉を使ったのはサン・シモン主義者のピエール・ルルーだといわれている（サン・シモンという説もあり）が、「社会主義」という表現そのものが、すでにユートピア社会主義の産物であるといえる。キリスト教社会主義者などが、資本主義でもなく社会主義でもない社会といえ、自己矛盾しているように思われるが、ここでは、資本主義に立脚した社会を正義の理想により適うように再組織しようとするすべての思想・主張を「社会主義」だと理解しておく。

（注4）「ユートピア」という言葉は、トマス・モアによる1516年刊の『ユートピア（Utopia）』で用いられたギリシャ語からの造語（ギリシャ語のウー＝無、トポス＝場所の複合詞）で、ギリシャ語の本来の意味から離れて「幸福なる国」を意味するものとして用いられている。カウツキー（1926）は、唯物史観にたつてトマス・モアのユートピアを論じており、モアを「ユートピア社会主義」の父であったとしている。なお、モアは英国の官僚の最高位である大法官（Lord Chancellor）の地位にも就いたが、国王をイングランド国教会の首長とすることに反対したことで、ヘンリー8世によって反逆罪として処刑され、その後カトリックと英国国教会の聖人となっている。

（注5）16世紀の宗教改革とそれに続く科学技術の発達に伴って支配的となった啓蒙思想は、従来の宗教的な価値観や秩序を葬る力を持ち、それはなお今日も我々の思考を支配している。

（注6）サン・シモンは、1825年に、教皇に対して「キリスト教の原理を完全に実行し、人びとを天上においてばかりでなく、地上においても幸福にすること、人類を、神的な道德の根本原理にしたがって組織すること、そしてもっとも多数を占め、かつ、もっとも貧しい階級の道德的、身体的状態を適切に改善するために、戦う教会の全権能と全手段とをもちいること」を訴えている（Lefranc, G. (1966) 花崎訳・上33p）。これに対しての直接的な回答というわけではないが、1891年に発布されたレオ13世の有名な回勅（レールム・ノヴァルム）は、結果的に、この訴えに対する回答でもあった。

2 ユートピアの持つ力

前述のように「ユートピア」という言葉は、トマス・モアによる1516年刊の『ユートピア（Utopia）』で用いられた言葉であり、そこでは原義から離れて「幸福なる国」の意味で用いられている。

先に「ユートピア社会主義者」という表現を用いたが、わが国では、マルクスの『共産党宣言』の翻訳者たちが、「ユートピア」を「空想」とし「空想的社会主義者」と訳したことで、非科学的で誤った思想であるかのようなイメージが定着したことは残念なことである（注7）。

しかし、「ユートピア」は、過去・現在の実験の経験を踏まえた人間社会の将来についての自覚的な夢であり、単なる夢、夢想ではない。それは、「現実の素材つまり経験的かつ科学的な道具や所産を文明に転化する触媒であり、その文明とは、人間精神のなかに最初は一心象として発展し、やがて

具体化するもの」(Dubos, R. (1963) 三浦訳58p)である。

社会主義に共感をもっていたオスカー・ワイルドの言葉を借りれば「ユートピアを含まない世界地図は、人類が常に着陸している1つの国を除外しているため、一瞥する価値さえない。そして、人類がそこに着陸すると、それは外を見て、そしてより良い国を見て、出航するのである。進歩はユートピアの実現」(Wilde, O (1891) 西村訳323p)である。

レイドローにも影響を与え、わが国では『我と汝』の訳本で有名なM.ブーバーは、その著書『Paths in Utopia』で、「『ユートピア』社会主義こそは、社会の構造的更新の^{うちない}埒内で、時々可能な最大限の協同社会的自治を獲得するために闘うのである」(Buber, M. (1949) 長谷川訳28p)とし、先駆者としてのサン・シモン、フーリエ、オウエン、それに続くプルードン、クロボトキン、ランダウヴァーの先駆的協同組合思想に触れ、初期のイギリス、フランスにおける協同組合の実験を踏まえ、協同組合社会の実現のために必要なことを説き、マルクス主義の限界、ロシアのレーニンの実験の失敗原因を解きほぐし、もう一つの実験としてのキブツの試みに期待を寄せている(ブーバーは、その段階では後述するモンドラゴンの実験は知りえなかった)。

レイドローは、労働者生産協同組合をして、第二の産業革命をもたらす可能性のある最良の手段として位置づけを与えているが、次にレイドロー報告の意義を振り返っ

ておこう。

(注7)「空想」には、マイナスのイメージがあり、マルクスの『共産党宣言』の最近の訳では、「空想」ではなく「ユートピア」とそのままの訳語が当てられている。しかし、残念なことにエンゲルスの『空想から科学へ』は、依然として「科学」との対比で「空想」という訳語が当てられたままである。

ユートピア社会主義者らをユートピア的として退けたマルクス、エンゲルスが、プロレタリア革命による「必然の国から自由の国へ」というときの「自由の国」は、具体的なユートピア像のないユートピア、言い換えれば幻想でしかない。マルクス主義哲学者のブロッホは、ブルジョアの俗物唯物論を受け継いだ無神論に基づいて築かれた社会主義には、人間の魂の問題が存在する余地はなく、物質的次元で平等にのみ固執している社会主義は真の「御国」にはなりえないとする(Bloch, E. (1918) 好村訳307p以下)

なお、マルクス等によるユートピア社会主義者としてのレッテル貼りは、自分たちのプロレタリア革命路線の邪魔となる思想を排除するためであり、「科学的」であることが真理であるかのような錯覚を与えているという点で、19世紀の啓蒙主義の影響が強くうかがえる。

3 レイドロー報告の今日的意義

70年代は、流通革命による競争激化のなかで、ヨーロッパの生協は、軒並み経営が行き詰まり、株式会社に転換する等の動きがひろまった時代であった。

そうしたなか、80年のモスクワ大会でのレイドロー報告は、協同組合運動の思想的危機を指摘するとともに4つの取り組むべき優先分野を提言した。

その一として、ウェッブ夫妻が死滅したと宣言した労働者協同組合の復活・再生をとりあげ、そのなかでスペインのモンドラゴン協同組合とスコット・バーダー・コモ

ンウェルスを紹介し、今後の取り組むべき優先分野（第2の優先分野）として労働者生産協同組合を提言した。

そのほか、都市化の進展に伴う孤独と疎外の海のなかに共同社会を打ち立てることで、都市のなかに住民が容易に帰属意識をもてる村（協同組合の小経済圏）を確立（協同組合地域社会の建設）すること（第4の優先分野）を提言した。これは、デジタル社会の進展とともに人々が分断されている今日の社会において違った形でその重要性が高まっているといえよう。

このレイドロー報告を契機に、モンドラゴンは世界中から注目されるようになり、わが国でも多くの翻訳書やレポート・論文がだされている。

レイドロー報告が提言した4つの優先分野は、以上の2つに加え、第1優先分野としての世界の飢えをみたす協同組合、第3の優先分野としての保全者社会（conserver society）のための協同組合で、後者は消費者協同組合についての提言で、単に商品売るだけの協同組合ではなく、脱工業化消費社会の気取りと浪費を放棄させる方向で生まれ変わるべきとの提言であった。

レイドロー報告は、わが国の総合農協を高く評価しており、評価されたことをもって関係者は自信を得たようにも思われる。しかし、報告が協同組合の将来の方向として4つの選択肢を提起したときの背景は、当時よりも深刻度を増してきており、「協同組合地域社会の建設」という提言、さらには「世界の飢えをみたす協同組合」という

提言について、仮にそれらが正しく・望ましいという認識があるのであれば、今日時点において、それらにどこまで応えられているか、応えるためには何をしなければならないかを見つめ直す必要があるように思われる。

果たして、レイドローが最も危惧した思想上の危機を意識し、それを乗り越えることはできているのであろうか。協同組合が単なるビジネス・モデルでなく、「協同組合運動」と「運動」であるというからには、そこには目指すべき目的・目標、それをユートピアの建設だとは言わないにしても、何らかの目的・目標があるはずだし、なければならないはずである。

4 モンドラゴンの実践

19世紀のヨーロッパの協同組合主義の中心にあったのが労働者の生産協同組合であった。その後、多くの協同組合が挫折・衰退するなかでほとんど注目されてこなかったが、戦後、世界中で労働者協同組合が再生し、多くの国の政府も病める資本主義産業救済のために労働者協同組合に注目した。

また、それは、70年代になって資本主義の成長に陰りがみえだし、戦後の完全雇用による労働者福祉を目指した福祉国家が衰退し始めるなかでの、それへの対応としての自主的な動きでもあった。

前述のように、レイドローは、協同組合が今後取り組むべき優先分野の一つとして、

労働者生産協同組合をとりあげたのは、ほかの種類の協同組合とは異なる様々な困難な問題があるということに留意しつつも、それは第2次産業革命の契機になる可能性があるという認識があったからである。

モンドラゴンは、今更紹介するまでもないであろうが、40年代後半、イデオロギーの違いによって分断され、内戦によって物理的なインフラが破壊・枯渇した社会基盤から立ち上がり、カトリック神父のホセ・アリス・メンディアリエタ・マドリアーガ（José María Arizmendiarieta Madariaga、以下「アリスメンディ」という）の指導のもと、おそらく世界で最も成功した従業員所有の産業、小売、金融、サービスその他の協同組合の複合体である。現在（2019年時点）では、95の独立した協同組合、14の研究開発センター、その他多数の関連企業・団体によって構成される、約80,000人の従業員（スペイン国内：65,000人）を抱える協同組合コングロマリットとなっている。

08年以後の住宅不況などの影響を受けて、世界的に事業展開していたモンドラゴンの家電メーカーのファーゴ（Fargo Electrodomesticos、最初の協同組合、アリスメンディの指導を受けた5人の若者が設立した灯油ストーブ製作の協同組合を起源とする）が13年に倒産し、各方面にショックを与えた。破綻の原因についてはいろいろ言われているが、海外の拠点は売却等が行われ、スペイン国内では、モンドラゴン協同組合の連帯の仕組みのなかでその課題は吸収され、公表の数値をみる限りでは

その影響はすでに解消されたようである。

モンドラゴンが成功している理由は、一通りではなく様々な解釈が可能で、多くの分析があるが、その成功は、制度や仕組みというよりも、むしろその根底にある思想・価値観の共有にあると筆者は考えている。それはアリスメンディ神父の協同組合主義であり、そしてそれはローマ・カトリックの社会教説（Social Doctrine）の実践としてのモンドラゴンという理解が可能であろう。

アリスメンディの司祭としての職務に影響を与えたのは、1891年のレオ13世の回勅^{かいちよく}「レールム・ノヴァルム（Rerum Novarum）」（労働問題について）とその40周年にあたる1931年に発布されたピオ11世の回勅『クアドラジェッジモ・アンノ（Quadragesimo Anno.）』（社会秩序の再構築について）だったといわれる（Molina, F. & Miguez, A. (2008), Geoghegan, C. (2017)）（注8）。ピオ11世の回勅は、抑制のきかない資本主義と社会主義・共産主義の全体主義の危険性を警告し、連帯と補完性に基づく社会秩序の再構築をもとめたもので、この新しい秩序は人間の尊厳を基礎としている。

社会変革には教育が大切なことから、アリスメンディは、ピオ11世が提唱・奨励した「カトリック・アクション」（注9）に基づき、教会の社会教説をよく理解し、司祭と一緒に働いて働くリーダーの若者を育てることに始まり、具体的な実践の一つとして専門学校もつくった。卒業生の5人が労働者協同組合を設立したことは前述したが、

アリスメンディにとっては、協同組合はあくまでも手段であって、単に経済事業を成功させるだけではなく、カトリックの社会教説のコミュニティにおける実現が目的だった。

このカトリックの社会教説が実践となって現れた例は、モンドラゴンにとどまるものではないが、協同組合の原則や組織運営の仕組み自体は、協同組合の成功を保証するものではなく、重要なのはそれを根底において支えている共有された価値観であるので、ここではモンドラゴンの協同組合人の精神ともいべきアリスメンディの言葉をいくつか拾っておきたい。

- ・ 協同組合主義とは、教育という手法を用いた経済運動だといわれてきたが、協同組合主義は経済という手法を用いた教育運動である (Arizmendiarieta, J. M. (2000) 218項)
- ・ 協同組合主義が向かうところのものは、静的で固定的な秩序ではなく、進化を続けるものである。理論ではなく行動と経験から生まれる協同組合主義は、より良い表現形式を常に模索するなかで考えられ望まれるものでなければならない (同 243項)
- ・ 協同組合主義がパターンリズムと正反対であるだけでなく、順応主義や保守主義とも正反対のものであるならば、私たちは社会革新の最先端にとどまり続けなければならない (257項)
- ・ 協同組合主義は、企業の財政やガバナンスを変えることを目的とするのではな

く、企業の社会的性質や機能を変えることを目的とする (452項)

- ・ 必要な資本を引きつけるだけの構造的な能力をもたない協同組合主義は、一時的な解決策であり、時代遅れ委の公式である (486項)
- ・ 協同組合主義が労働者の真の解放であるということを望むのであれば、参加者は必要な経営参画と経済的責任を受け入れることが必要である。これによって、私たちの企業は独自のリソースで自らを維持できるようになる (501項)
- ・ 私たちの協同組合主義の実験は、自由と誠実さを背景に、労働者自身によって設立された連帯思考の協同組合グループの形をとる (548項)

ところで、ウェッブ夫妻は、『消費者協同組合運動』のなかで、「なぜ生産者の民主主義が生産の組織化に失敗するのか」に関して、協同組合の「退化論」につながる具体的な理由を述べており (Webb, S. & Webb, B. (1921) pp.462-468)、これは多くの左派の思想家の間で共有されているかのようである。

これに対して、ギブソン・グラハムは、その「退化論」に対する反証としてモンドラゴンの倫理的経済・連帯経済をとりあげ、①賃金水準の設定の考え方と方法、②それに伴う余剰の発生に連動した余剰金についての協同組合コミュニティの経済の拡大・強化の方法としての管理と分配の仕組みの工夫、③イノベーションのための研究・開発の重視、③経営に関する条件を明

確に規定すると同時に経営層の労働者の個人的な権利と集団的な責任の明確化、④内部的な問題の非紛争的な紛争解決の技術の開発、⑤複数の生産ラインや産業の拡大による排他主義や集団の個人主義が持つ危険性の協同組合の原則と倫理的実践による回避など、重要な経験的反証を提供し、協同組合の退化や協同組合が失敗に向かう論理的必然性がないことを示唆している(Gibson-Graham, J.K. (2003) 157p)。

(注8) レールム・ノヴァルムから100年目の1991年には、ヨハネ・パウロ2世の回勅「センテシムス・アニウス (Centesimus Annus)」が発表されるが、その作成にあたって教皇から意見を求められた宇沢弘文は、この新しい「レールム・ノヴァルム」のサブタイトルは、「社会主義の弊害と資本主義の幻想」がふさわしいのではないかと述べたという(宇沢 (2017))。この年は、くしくもソ連邦崩壊の年となった。

(注9) カトリック・アクションとは、「位階制度(司教)の使徒職への信徒の参与」(Participatio Laicorum Apostolatu Hierarchiae)と定義され、信徒の活動団体が司教の「委任」(Mandatum)を受けてその指導下におかれるとき、正式にカトリック・アクションと呼ばれた。今日、この言葉は聞かれなくなったが、その後第2バチカン公会議(1962-1965)後は、司祭の委任によってではなく、洗礼と堅信の秘跡によって、信徒はキリスト自身から任命され派遣された使徒だとされている。

5 資本主義をめぐる新たな危機と協同組合

19世紀のユートピア社会主義者が解決しようとした問題の多くは、その後その多くは政治・社会政策により解決されるに至ったが、現代の資本主義は19世紀とは質的に異なる新たな矛盾に直面している。70年代には、資本主義経済に陰りが見え始めると

ともに、戦後の完全雇用を理想とした福祉国家の衰退が始まり、それとともに先進資本主義国では新自由主義的政策が推し進められることとなった。さらに、91年のソ連邦崩壊は、それがあたかも社会主義に対する資本主義の勝利であるかのように、資本主義によるイデオロギー的支配が始まる契機となった。それは経済成長の低迷に呼応したものといえるが、実体経済が弱体化する一方で金融部門の膨張は、08年のリーマンショックによる金融危機を招来した。それは、資本主義の新たな危機が露呈したとも評されるべきことであった。

こうしたことを背景に資本主義の終焉^{しゅうえん}をめぐる議論(注10)が活発になるが、終焉までの道筋や現在の資本主義に代わる具体的な将来像は描かれるまでには至っていない。それは、資本主義の対抗軸としての社会主義・共産主義が、ソ連邦の崩壊(1991年)とともに「自滅」したことによる影響もあるように思われる。しかし、現実の経済は、賃労働による資本主義市場向けの商品製造をする資本中心主義の企業だけが担っているわけではない。むしろそれは一部で多様な企業形態や経済主体が存在しており(Gibson-Graham, J. K. [2006b]145p)、資本主義か社会主義かといった二項対立的な議論はもはや有益ではないように思われる。

したがって、ここで「将来像は描かれていない」といったが、そうした理解のし方がそもそも間違っているともいえなくはない。現在の危機の原因を特定し、それを除去するというのは理論的には可能なはずで

ある。そして、それは主として政治の役割であるし、それを選択するのは我々自身にほかならない。

ところで、資本中心主義の経済である資本主義が危機に遭遇するたび、それと対立的な人間中心の経済組織である協同組合などへの関心が高まる現象がみられる。最近では、コモンズ、社会的経済、シェアリング・エコノミーなど、様々な概念が誕生・復活・再生してきている（注11）。

そうしたなかで、「協同組合は資本主義における資本中心主義の企業の代替的なものとなり得るか」といった古くて新しい議論も行われている（注12）。それはとりわけ労働者生産協同組合に関連する議論で、モンドラゴンも当然ながらその後論では取り上げられることになる。これらの議論における論点を分析する余裕もないが、労働者生産組合はオルタナティブにはなれない、ないしは成功しないという論者の根拠は、資本主義者であれ反資本主義者であれ、資本主義のもとでの中心的な概念・視点によって導かれているように思われる。それは、資本中心主義の見方が資本主義者ばかりでなく反資本主義者とその考え方も支配しているからである（Gibson-Graham, J. K. (2006a) 6・21p）。

現実にも協同組合がすべての資本中心的企業にとって代わるというのは非現実的なことであり、資本中心的な企業か、人間中心的な民主的企業かといった二項対立の議論は、前述のように余り意味のない議論であり、複眼的な経済思想やモノの見方が重

要だと思われる。ギブソン・グラハムにいわせると、資本主義を協同組合主義に置き換えるための戦略がないという主張は、経済を単一的かつ資本主義的なものとしてみることにより目がくらんでいる場合にのみ有効な批判であるということになる（Gibson-Graham, J. K. (2003)）。

ではどうしたら認識の枠組みを変えられるかということが問題になるが、現在の短絡的な新自由主義的、経済成長・金融至上主義的な経済アプローチからの脱却が必要だということになる。そのためには制度的枠組みを変えるための政治的なコミットメントを含む努力がまずもって不可欠であろう。さらに、政治的環境に加え、私たちの認識の枠組みを支えている様々な環境そのものを変える必要があり、そのためにも協同組合を含め非資本主義的な経済組織が目に見える形で発展していくことが求められる。

（注10） 濱田 康行・金子 勇（2021）、Harvey, D. (2014)、Streeck, W. (2013) ほか。なお、シュトレックは、現在の経済危機は、①銀行危機、②国家財政（債務）危機および③体経済危機（経済成長危機実）の三重危機のなかにあるとする。

（注11） 世界の多様な協同組合の誕生や動きを説明する余裕はないので、差し当たりSchneider, N. (2018)、少し古くなるがウェブジャーナル「Affinities」のThe New Cooperativism（編者：Marcelo Vieta）の各論文（<https://ojs.library.queensu.ca/index.php/affinities/issue/view/574>）等を参照願いたい。

（注12） Mulholland, N. (2020), Are cooperatives the alternative to failing capitalism? <https://www.socialistworld.net/2020/10/17/are-cooperatives-the-alternative-to-failing-capitalism/> (2023年7月26日最終アクセス) Gregory, D. (2015), Postscript: Is there a co-operative alternative to capitalism? <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/>

おわりに

最後に、ラスキンの『Unto this Last (この最後の者にも)』(注13)をとりあげ、そのタイトルにもなっている新約聖書のぶどう園のたとえ話について考えてみたい。少し長くなるが、ここに全文を引用しておく。

「天の国は、ある家の主人に似ている。主人は、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けとともに出かけて行った。／彼は、1日につき1デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。／また、9時ごろ行ってみると、何もしないで広場で立っている人々がいたので、／『あなたがたもぶどう園に行きなさい。それなりの賃金を払うから』と言った。／それで、彼らは出かけて行った。主人はまた、12時ごろと3時ごろに出て行って、同じようにした。／5時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と言った。／彼らが、『誰も雇ってくれないのです』と答えたので、主人は、『あなたがたもぶどう園に行きなさい』と言った。／夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい。』／そこで、5時ごろに雇われた人

たちが来て、1デナリオンずつ受け取った。／最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていたが、やはり1デナリオンずつであった。／それで、受け取ると、主人に不平を言った。／『最後に来たこの連中は、1時間しか働かなかったのに、丸一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと同じ扱いをなさるとは。』／主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたは私と1デナリオンの約束をしたではないか。／自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。／自分の物を自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前のよさを妬むのか。』／このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」(マタイ福音書第20章1節～16節・日本聖書協会共同訳)

このたとえ話については、様々な解釈が可能であろう。これを、ICAのスローガンである“Cooperatives Build a Better World”が目指す協同組合の共通の価値と原則に基づいて形成される社会の結果として、誰も取り残さず、誰も置き去りにしない経済を意味するものとして理解することもできよう。

しかし、心のなかでは、おそらく多くの人が、ぶどう園の主人(イエス)のやり方は、彼が契約には違反してはいないとしても不当だと感じるのではないかと思われる。

1 デナリオンというのは当時の過不足のない日当に相当するといわれている報酬であり、ぶどう園のたとえ話は、競争社会のなかでいつも他人と比較しながら生活している囚われの身となっている我々自身を解放し、豊かな生き方へと招く福音として読むことも可能であろう。これを不当だと感じるとすれば、それは我々がいかに功利的・利己的な考え方に支配されているかを示すものだともいえる。

功利的・利己的な心というのは、何も資本主義と直接結びつくものではない。その対象がどこに向かうかの違いはあっても、それはいかなる時代にもあったし、協同組合社会になったらなくなるとか、社会主義や共産主義が実現すればなくなるといった性格のものでもない。

しかし、それを乗り越えることができるものがあるとすれば、価値観の転換、人間・社会のあり方を変えろという意志であり、それは我々の理性を超えるところに存在するものを信じ、心を一つにすることではなかろうか。それは、真の革命というべき人間の心の革命なのかもしれない。また、そのことなしには、ICAが目指す社会も実現はできないように思われる。

(注13) ラスキンのこの本は、アダム・スミスの古典派経済学を批判した書でガンディーははじめ世界中の人たちに大きな影響を与えてきた。そのなかの“*There is no wealth but life*”は有名で、宇沢弘文は、「経済学を学ぶときの基本姿勢として大事にしてきたし、経済学者として生涯を生きる出発点」だったと述べている(宇沢(2017))。

インド独立運動の父といわれるガンディーもこの書物に強く心を打たれ、1904年という早い

時期に、赴任先の南アフリカでフェニックス農園を、続いてトルストイ農園をひらいて、協同組合的共同体の実現を試みている。そしてインドに戻ってからは、協同組合こそがインドが経済的自由を得る道だと固く信じ、村の経済的自立のために協同組合運動の考えを紹介した。ガンディーが考えた村の自立は、最終的には、個人個人が自立することで、そしてみんなが自由に、互いに力を出し合うことができる極めて高度に洗練された社会となることであり、このような社会は、真理と非暴力の基盤のうえにのみ構築でき、神への強い信仰がなければ実現できないと考えていた。ここでいう「神」というのは、ガンディーにとっては「真理」、それは愛であり、倫理であり、道徳であり、光と生命の源であるところの、すべてを超えた存在を意味している。それは、特定の宗教・宗派の「神」ではなく、多様な民族、言語、宗教が存在するインドにおいて、たとえ無神論者であったとしても内なるところに普遍的に存在するものとしての「神」といってよい(ガンディー(2011)から)。

<参考文献>

- ・宇沢弘文(2017)『人間の経済』(新潮新書713) 新潮社
- ・エマニュエル・トッドほか(2018)『世界の未来——ギャンブル化する民主主義、帝国化する資本主義——』朝日新聞出版
- ・エンゲルス著(1966)『空想より科学へ——社会主義の発展——』(大内兵衛訳) 岩波書店
- ・カール・マルクス(2010)『新訳 共産党宣言——初版ブルクハルト版(1848年)——』(的場昭弘訳) 作品社
- ・五島茂・坂本慶一編(1975)『世界の名著 続 8 オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社
- ・日本協同組合学会編(1989)『西暦2000年における協同組合——レイドロー報告——』日本経済評論社
- ・濱田康行・金子勇(2021)「新時代の経済社会システム：資本主義終焉論を超えて」『福岡大学商学論叢』66巻2・3号、139～184頁
- ・マハートマ・ガンディー(2011)『ガンディーの言葉』(鳥居千代香訳) 岩波書店
- ・Arizmendiarieta, J. M. (2000), *Reflections* (translated by Cherie Herrera, Cristina Herrera et al.) : Otalora.
- ・Bloch, E. (1918), *Geist der Utopie*, München : Duncker & Humblot. (好村富士彦訳『ユートピアの精神』白水社・2011)
- ・Buber, M. (1949), *Paths in Utopia* : Routledge

and Kegan Paul.Ltd. (長谷川進訳『もう一つの社会主義——ユートピアの途——』[理想社・1959年] = 1950年のドイツ語版からの翻訳で、著者が付け加えた部分もあり英語版とは章も入れ替わっている)

- Cole,G.D.H. (1947), *A short history of the British working-class movement, 1789-1947*. (林健太郎ほか訳『イギリス労働運動史Ⅱ』岩波書店・1953年)
- Dixson-Decle, S. et al (2022), *Earth for All: A Survival Guide for Humanity*. (武内和彦監訳『Earth for All (万人のための地球——「成長の限界」から50年ローマクラブ新レポート——)』丸善出版・2022年)
- Dubos, R. (1963), *The Dreams of Reason—science and utopia*, New York : Columbia University Press. (三浦修訳『理性という名の怪物——科学とユートピア——』思索社・1974年)
- Geoghegan,C. (2017), “Clara Geoghegan: Bring on the Cooperative, Catholic Revolution,” <https://www.catholicweekly.com.au/clara-geoghegan-bring-on-the-cooperative-catholic-revolution/> (2023年7月25日最終アクセス)
- Gibson-Graham, J. K. (2003), Enabling Ethical Economies: Cooperativism and Class, *Critical Sociology*, Volume 29, issue 2.
- Gibson-Graham, J. K. (2006a), *The end of capitalism (as we knew it) : a feminist critique of political economy* : University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham, J. K. (2006b), *A Postcapitalist Politics (english edition)* : University of Minnesota Press.
- Harvey, D. (2014), *Seventeen Contradictions and the End of Capitalism* : Oxford University Press. (大屋定晴ほか訳『資本主義の終焉——資本の17の矛盾とグローバル経済の未来——』作品社・2017年)
- Kautsky,K. (1926), *Thomas More und seine Utopie mit einer historischen Einleitung*, 6. Auflage : J.H.W. Dietz Nachf. (渡辺義晴訳『トーマス・モアとそのユートピア』東京教育書林・1957年)
- Kropotkin, K. (1902), *Mutual Aid: A Factor of Evolution*, London: McClure Phillips & Co. (ク

ロポトキン著 (大杉栄訳)『〈新装〉増補修訂版 相互扶助論』同時代社・2017年[同時代社編集部増補修訂]

- Lefranc, G. (1966), *Histoire des doctrines sociales*, Paris ; Aubier-Montaigne. (花崎皋平訳『現代ヨーロッパ社会思想史 (上) (下)』社会思想社・1976年)
- Molina, F. & Miguez, A. (2008), “The Origins of Mondragon: Catholic Co-Operativism and Social Movement in a Basque Valley (1941-59) ,” *Social History*, Vol. 33 No. 3 August 2008, pp. 284-298.
- Ruskin, J. (1860), *Unto This Last*, Essays from the Cornhill Magazine 1860, reprinted as *Unto This Last* in 1862. (飯塚一郎・木村正身訳『この最後の者にも/ごまとゆり』中央公論新社・2008年)
- Santocildes, M. E. et al. (2021), *Story of social economy in the Basque Country*, Aitziber Mugarra Elorriaga, 2021.
- Schneider, N. (2018), *Everything for Everyone: The Radical Tradition that Is Shaping the Next Economy*, Nation Books. (月谷真紀訳『ネクスト・シェア—ポスト資本主義を生み出す「協同」プラットフォーム』東洋経済・2020年)
- Streeck,W. (2013), *Gekaufte Zeit. Die vertagte Krise des demokratischen Kapitalismus*, Berlin: Suhrkamp Verlag. (鈴木直訳『時間かせぎの資本主義——いつまで危機を先送りできるか』みすず書房・2016年)
- Webb, S. & Webb, B. (1921), *The Consumer's Co-operative Movement*, London: Longmans, Green and Co.
- Wild, O. (1891), *The Soul of Man Under Socialism*, in *Fortnightly Review*. (西村孝次訳『社会主義下の人間の魂 (The Soul of Man Under Socialism)』『オスカー・ワイルド全集4』青土社・1989年所収)

(あけだ つくる)